

Civimoto 35

し び の 一 と

高松市美術館
ボランティア通信
2017年11月1日発行

誌上ギャラリートーク

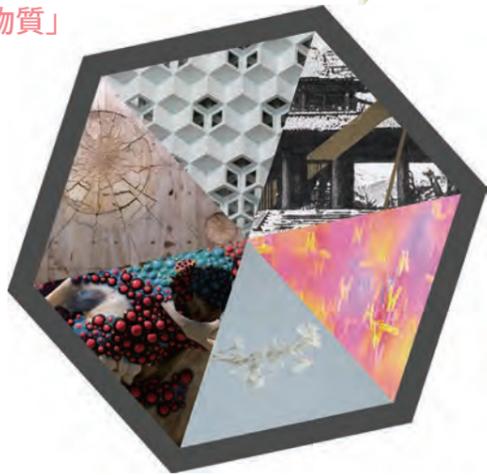


「高松コンテンポラリーアート・アニュアルVol.06 物語る物質」 2017年10月22日[日]～11月26日[日]

高松コンテンポラリーアート・アニュアルも、2009年に初めて開催されて以来、今年で7回目を迎え、毎回楽しみにして下さるファンも大勢いらっしゃると思います。ご存知の通り、この展覧会は、独創性、将来性のある作家を紹介する、年に一度の現代美術のグループ展です。今回のテーマは、『物語る物質』。6人の作家達の仕事を紹介致します。

無数の点をシルクスクリーンで60～100回程度塗り重ね、平面状に高さ数ミリのインクの柱を生じさせ、見る角度によって様々な表情を見せる独自の作品を制作する小野耕石。泥漿鑄込み成形による、一辺5cmの中空立方体を集積させた格子構造の、緊張感あふれる陶芸作品を制作している亀井洋一郎。2009年友人の猟師の鹿狩に同行し、その時の出来事に衝撃を受けたのが契機となり、以後、鹿の角や骨を素材に、繊細かつ緻密な草花の彫刻を制作する橋本雅也。フィールドワークの手法で、その場所の歴史や日常を調査したことを基に、現地で採集した土とアクリル絵具で風景を描く他、土を用いたインスタレーションも手掛ける南条嘉毅。SFや科学哲学などを参照し、様々な素材による彫刻や3DDGによる映像などを制作する須賀悠介。石鹸、モール、洗濯バサミなどの日常的素材を大量に組み合わせるなどして、圧倒的なスケールのインスタレーションを展開する高本敦基。六人六様の超ユニークな技に遭遇して、物言わぬ物質達が皆様に一体何を雄弁に語るか、お楽しみに！

[合田笑子]



第3期常設展 展示室1「日常」／展示室2「Night 潜む世界」 2017年4月11日[火]～6月25日[日]

第3期常設展は、展示室1が「日常」、展示室2が「Night—潜む世界」というテーマで、当館の収蔵作品を展示しています。ここでは、漆芸作品についてご紹介致します。

磯井如真《蒔罨干菓子盆 梅の図》は夜空に浮かぶ白梅を表現した作品。花卉や蕊、蕾や枝振りが、如真が編み出した「点彫り蒔罨」の技法で、濃淡鮮やかに表出され、図柄に微妙な陰影や立体感を与え、簡潔な構成の中にも格調の高さが際立っています。磯井正美《蒔罨月あかり 食籠》では真つ暗な夜空に月が浮かび、その周りを星々が取り巻き、月あかりを受けてキラキラと輝く波がさざめいています。月と星を貝で、波を蒔罨の手法であらわした食籠で、器の形状とモチーフが見事に調和している作品です。太田傳《藍胎蒔罨箱 赤い貝殻》は見残の海岸で見た、落日の中に赤く照らし出された貝が心に残り、その印象を作品にしたもの。貝の背景には砂のイメージを波形で表現し、漆の特徴的な赤と黒が太田独自の藍胎蒔罨技法の中に十分生かされた美しい作品です。音丸耕堂《彫漆月之花手箱》は黒漆を20回ほど塗り重ね、その上に白、朱、黄などの明るい色漆を重ね、最後に黒漆を厚く塗り重ねています。彫り込む深さによって、夜の間に開く夕顔の花を浮かび上がらせた、刀の刃の光る彫漆の作品です。



(左)音丸耕堂《彫漆月之花手箱》1942年、(右)磯井正美《蒔罨月あかり 食籠》1973年 (共に 高松市美術館蔵)

日本人は、古から、電気が普及するまでの長い間、揺れる蠟燭の灯や、黎明や夕暮れの薄明かり、夜を照らす月明かり、行灯や障子越しのやわらかい光とともに暮らしてきました。今回の展示では、きっとそんな日本人らしい美をみることができるといえるでしょう。[合田笑子]

日本人は、古から、電気が普及するまでの長い間、揺れる蠟燭の灯や、黎明や夕暮れの薄明かり、夜を照らす月明かり、行灯や障子越しのやわらかい光とともに暮らしてきました。今回の展示では、きっとそんな日本人らしい美をみることができるといえるでしょう。[合田笑子]

塩江探訪 塩江美術館へ行ってきました。

山に囲まれた塩江温泉郷の離れにある美術館、高松市美術館の兄弟館ですが、閉じられた箱である高松市美術館に比べ全てのスペースに外光を取り入れる天窗や扉があり、三角形やドーム型の屋根や丸いテラスの組み合わせは建物自体が立体作品のようです。ホール壁にはアーチ形の階段があり、そこに作品が鎮座することも。ドーム型の天井からは空が、扉からは緑の芝生や戸外作品、青々とした木々が見え、風が吹いたり雨が降ったり枝葉が揺れると室内の作品と呼応して絶妙な味を醸し出します。

夏には塩江美術館「コレクション展」、今回は「十人十色、色を楽しむ」と題された展覧会で、10人のアーティストによる色と形の饗宴、幼い日の記憶を揺さぶられるような絵(小林正六、池原昭治)や思わずそのまま持って帰りたくなる茄子の絵(池田利夫)、軽いリズムで図形がダンスしてるような心の弾む作品(川島猛)が展示されており、お馴染み四宮金一作品はいつ観てもマス目のある工作用紙で立体模型を作りたくなります。

秋には毎年恒例の「思可牟(しかむ)展」。幸い観に行った日に作家のおひとり、平野年紀氏が会場に居られ、色々お話を伺う事が出来ました。いつも人間の生死にまつわるインスタレーション作品を出されてる平野さん、今年は制作にかかる頃にずっと介護されていたお父様が亡くなられたということで、ひとしお思いの強い記念碑的作品となったようです。「…父への弔い、祭壇です」。

「思可牟(しかむ)」は香川県出身の京都市立芸術大学卒業生たちで結成されている美術グループで、年1回香川に結集し、ジャンルを問わず個々自由な創作品を持ち寄り展覧会を開いています。『思可牟』の名は漆芸家の明石朴景氏が名付け親で、いつも新しい試みに挑戦して



マルク・シャガール
《ラモオンとドリユアスの夢》
〔ダフニスとクロエより〕



西岡茂八郎
《ニッポンシリーズ97-1》
しがらみ(自明しと同心)

ていくという意志を込めて「むかし」の反対読みだそうです。

その他絵画あり、版画あり、陶芸あり、漆あり、厚かましくお願いしたら、ご自分の作品だけでなく全ての作品をご紹介くださった平野さん、本当にありがとうございました。 [池田幸子]

◁「十人十色、色を楽しむ」展示作品



△「思可牟(しかむ)」展 展示風景

塩江美術館 次回展覧会 「所幸則展 うさぎガールと黒縁眼鏡」～天使からの系譜～ 平成29年10月31日[火]—12月10日[日]

世界的に活躍する高松市出身の写真家所幸則の個展が開かれます。所幸則氏は写真に時間的な概念を取り込み、見慣れた風景を不思議な空間に変えて見せる作品をシリーズで発表されています。今回は「うさぎガールと黒縁眼鏡」シリーズより、ぜひご覧ください。



所幸則「Einstein romance」シリーズ



所幸則「うさぎガールと黒縁眼鏡」シリーズ

編集後記

◎アーティストの平野年紀さんが「父の死を迎えるときに数学の微分を思い出した」という話が印象的でした。どんどん値が小さくなる、どんどん小さくなって永遠に続く…ところが永遠ではなく突然訪れるわけですが、私も自分の母を送ったときに同じ感覚に陥ったなあと思い出しました。平野さんの作品「えいえんはないよ」は自分に繋がる作品です。 [池田幸子]

◎蜷川実花デザインのストールとかバッグを売店で売っていましたが、ちょっと高くは買えませんでした。やっと買えたのは缶バッジ…。でも、つけてみると、とてもステキでした。これで満足する私って、かわいそう？それとも幸せ？ [植松紀子]

◎素晴らしい芸術作品は、見るだけでも感動ですが、その感動を誰かに語ったり、文章にすると、感動が濃く増幅されます。 [合田笑子]

◎北原千鹿展のギャラリートークの当番日に、茶道の研究会が重なってしまい、江戸小紋に袋帯という、かなりかしてまった出で立ちでトークすることになりました。ぱっと見工芸の専門家のように、その実、子どもどこの素人なのであります。 [坂口弘子]

◎久しぶりに、エル・グレコの作品について調べました。最近、県外の美術館・博物館巡りをしていないので、ひさしぶりに行きたくまりました。これから秋！美術館巡りにもいい季節ですね。 [石床亜希]

◎今年はいろいろな場所でいわゆる「芸術祭」が開催されています。特に地方で行われる芸術祭はその場所と人々に向き合っ制作された作品をその場で鑑賞できるとも貴重な機会です。私も今年はそれらの芸術祭を満喫しました。 [高松市美術館 橋 美貴]

〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 TEL : 087-823-1711 FAX : 087-851-7250
発行：高松市美術館 編集：civi & 橋 美貴(高松市美術館) デザイン：福田千恵(高松市美術館)



エル・グレコ《受胎告知》
1590頃-1603年 / 大原美術館蔵

エル・グレコ作《受胎告知》

「受胎告知」は大天使ガブリエルが聖母マリアのもとを訪れ、神の子の受胎を告げる一古くから多くの画家によって描かれてきた聖書の一場面だ！
 だけど、僕がご主人様と登場しているのは、穏やかな庭園や静かな室内でご主人様がマリアと同じ目線で告げる多くのものとは違っているよ。

ご主人様は天の御使いらしく輝かしい稲光とみマリアのもとに降り立った！
 地には降りず、大天使らしく雲に乗って高い位置から告げている。
 左手には純潔を象徴するユリを持っているけど、右手は高くかかげて、威厳を感じさせる。

でも、凄いのをご主人様だけじゃないんだよ。
 いきなり大天使が目の前に降臨したら冷静ではいられないと思うんだけど、マリアはしっかりした視線で受けとめている。
 左手では冷静に本を押さえ、右手はご主人様への礼の意味かあげているよ。でもこの右手、もしかしたらマリアの驚きの表れでもあるのかな？

さて、僕は誰だと思っ？ご主人様が乗った雲？それともご主人様を照らす稲光？
 いやいや、僕は中央でご主人様と一緒にマリアに受胎を告知しに来た聖霊を象徴する鳩だよ。脇役だけど、中央に描かれて主役みたいでしょう？この場面では背景の影響で黒っぽく見えるけど、普段のご主人様の羽は白くてとっても綺麗なんだ！ご主人様と同じ白い羽が僕の自慢さ。光にはえてとっても綺麗なんだよ？

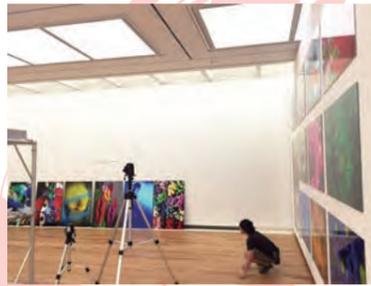
僕は奇跡的に日本にいるんだ。機会があって皆に会えたら嬉しいな！ [石床亜希]

大好評のうちに終わった蜷川実花展。この展示会はその展示方法も特殊なものでした。
 今回はそんな展示がどのように作られたのか、舞台裏をのぞいてみましょう！



①

まずは各展示室に作品を並べます。
 蜷川実花展では何段にも渡って作品を展示しました。
 そのため、少しのズレが後々厄介なことになってしまいます。
 そこで、測定器も使いながら正確な作業が必要です。



②

場所が決まったら、いざ壁に展示していきます。
 しゃがんでいる男性はおそらく反対側の壁で行われている作業の確認をしているのでしょう。



④ 同じく「桜」の展示室。
 こちらは床の作業風景です。
 お気づきでしたか？細長いシートを何枚も貼り合わせていました。
 つなぎ目がわからないほど精密な技です。



③

さて、蜷川実花展の見どころだった「桜」の展示室です。
 数人がかりで壁に大きなシートを貼っていきます。
 少しのシワも許されない、こちらも集中力と技が必要な作業です。



こうして蜷川実花展の展示室が出来上がりです！

[高松市美術館 橋 美貴]

7/7 [金] ~ 8/27 [日]
 特別展「蜷川実花展」

ギャラリートーク

今回の蜷川実花展、なんと入場者数約28000人だったそうです。すごい人気でした。

さて、蜷川実花さんといえば皆様よくご存知のあの蜷川幸雄さんのお嬢さんです。

彼女が生まれたころは、幸雄さんはまだ演出家(映画監督)として売れる前で奥さんが女優をして家計を支えていたため、実花さんは5歳くらいまではお父さんに育てられたそうです。遊び場は劇場のロビー。そのお父さんが、よく実花さんに言っていたのは、「分かれ道があって、多くの人が片方の道を選んでいる。だけど、君は、もう一つの誰も行かない道を行っていいんだよ」という言葉だそうです。そう言われて育った実花さんは、写真を独学で学び、独自の蜷川実花ワールドを作ったのですね。

「Flowers」の様な明るいポップな写真が、彼女の作品の代名詞だと思っていました。ところが、「PLANT A TREE」のようなしっとりとした作品もあり、「noir」の様な日常の中に普通にある、けれど残酷なものに対する視線を私たちに教えてくれたり、彼女の別の深い一面を見ることが出来たと思います。

そして、若い人たちに大人気だった最後の「桜」。東北大地震に対する彼女の思いが込められた、床から壁一面の桜の部屋は圧巻でした。

[植松紀子]



7/15 [木・祝] ワークショップ
 アートで遊ぼう！「蜷川実花展」
 (講師：川染奈緒 [高松市美術館])

アシスタント



まずは蜷川実花展示室第1室へ。本物のお花？作りもの？じっくりと眺めたり、遠くからながめたり。どの色が好き？あの写真面白い！綺麗！色んな感想を持ちながら中2階子ども十へ。さあ、うちわ作り開始です！

蜷川実花さんの写真に刺激を受けて、カラフルなお花や、自分の好きなモチーフやうちわにしたい絵柄を下絵にする。赤、青、紫、オレンジ、緑などのカラーフィルムを自分の好きな形に切ってシートに挟んでラミネート加工する。それに油性ペンで、模様や線、色を付けて、好きな形に切り、またラミネート加工。好きな形のうちわに整え、持ち手を付けて完成。

鮮やかな色合いのうちわや、油性ペンで細かく絵を描いたうちわなど、世界で1つだけのうちわが出来上がり。そのうちわで扇ぐ子どもたちの顔はとっても得意げで、キラキラしていました。 [田中えり子]

8/5 [土] ワークショップ
 美術館の日 高松市塩江美術館にて

アシスタント

ワークショップコーナーでは「風のアートモビールをつくらう！」と「ミストスプレーマジック」の2つが用意され、私はアートモビールの方を手伝いました。

午前8時半、塩江に向かう国道の温度表示はすでに31℃でした。塩江も朝から暑い。それでも9時には親子連れが入ってきて、次々と席が埋まりました。

モビールは、まず美術館が用意したチューリップの花びら、紫陽花、小さな花などの押し花やチラシ、セロファン、色々な形の色紙など、さまざまな材料から選んでフィルムに挟み、ラミネート加工します。加工したものをハサミで切り取り、ぶら下げるためにテグスを通せば出来上がりです。フィルムとテグスが透明なので花や色紙が宙に浮いているように見えました。

汗が止まらない暑い1日でしたが、モビールが風に揺れるのを見るのは気持ち良かったです。

[三好ひさ子]

CIVIの主な活動 2017.1月-8月

2/21 [火] ~ 3/26 [日]

ギャラリートーク

特別展「モダニズムの金工家 北原千鹿展」

以前、《山葡萄 置物》を、不思議な思いでただ眺めていただけの私ですが、ギャラリートークを担当するにあたり、金工の技術や材料のことはもとより、千鹿や、当時の金工家たちの工芸に対する熱い思いも知ることができ、大変勉強になりました。一体なぜ、繊細な細工の壺や水差しではなく、ごく単純な造形の、鉄の切りっぱなしのような動物や植物の置物が千鹿の代表作で、“この作品を見て驚かない者はいなかった”のか、また、昭和初期の美術界において、それがどれ程革命的であったのかを知ることは、私の金工に対する見方を大きく変えてくれました。

ギャラリートーク時、途中から一組のご夫婦が熱心に聞いてくださり、最後に奥様がとても感心した様子で、千鹿のことを、“ちか”という現代の若い女性作家だと思っていたとおっしゃり、私は「さもありません」と心の中でつぶやき、一期一会のよい時間になったなあ、嬉しく思いました。 [坂口弘子]



5/4 [木・祝] ワークショップ
 「高松丸亀町商店街連携事業イベント」
 (協力：高松丸亀町商店街振興組合)

アシスタント

絵本作家、林明子さんが初めて手がけた物語絵本『はじめてのおつかい』が誕生して今年で41年。絵本の中のみいちゃんのように、子ども達に街に出ておつかいを体験してもらおうワークショップです。今の子ども達も、みいちゃんのようにハラハラドキドキでしょうか。

地図を片手にいざ出発！お目当ての店の名前を聞くと、「あのおみせは、あの信号をわたったああるよ。」「あそこは、エスカレーターにのっていくんだよ。」という言葉が返ってくる。私自身が知らない店もあり、内心ほっとする。さて、ある店を探して店内に入ると、みんなキョロキョロ興味津々。「こんにちわー。美術館からの預かりものください。」の大きな声に店の方もにっこり。

美術館からの預かりもの。それは絵本から抜け出したみいちゃんでした。みんなでみいちゃんを絵本の中に返してあげました。 [鈴木典子]

